

## C-1

### エスキシェヒル・カラチャイ語のアクセント —チュルク諸語のアクセント類型論を視野に入れて—

菅沼健太郎（九州大学）

藤家洋昭（大阪大学）

アクバイ・オカン・ハルク（大阪大学）

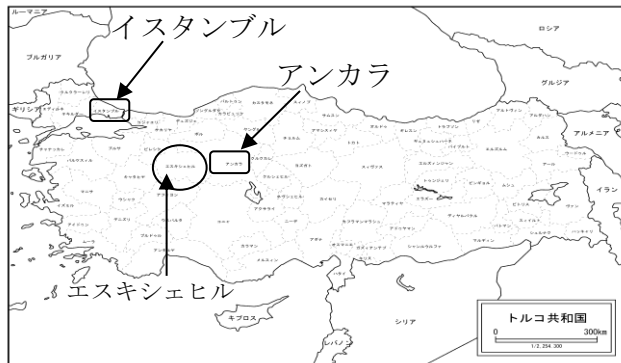
#### 1. はじめに

エスキシェヒル・カラチャイ語はトルコ共和国のエスキシェヒル県で話されているチュルク諸語のひとつである（エスキシェヒル県の位置を (1a) に示す）。Erdoğan and Semra (2016) によれば、現在エスキシェヒル・カラチャイ語は母語話者が減少しており、消滅の危機にあるという。また、管見によればエスキシェヒル・カラチャイ語の研究はほとんど行われておらず、早急な記述研究が求められる。

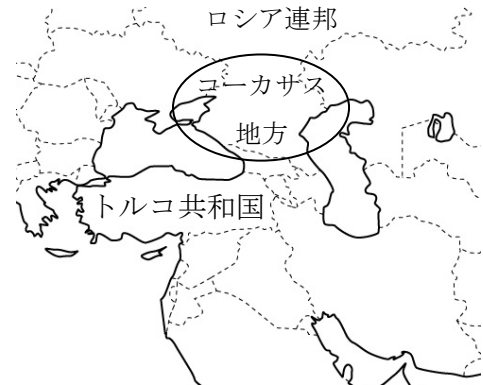
そこで、本発表では記述研究の一環としてエスキシェヒル・カラチャイ語のアクセントの記述を行う。そして、エスキシェヒル・カラチャイ語には例外アクセント、すなわち語末音節以外の位置にアクセントを生じさせる形態素が存在することを示す。また本発表では続けて、他のチュルク諸語（トルコ語、現代ウイグル語）を含めたチュルク諸語のアクセントに着目した類型論的考察を行う。そしてチュルク諸語のアクセント体系の相違点について述べる。

#### (1) a. トルコ共和国地図

(○で囲まれた部分がエスキシェヒル県である。)



#### b. コーカサス地方とトルコ共和国の位置



#### 2. エスキシェヒル・カラチャイ語概説

##### (2) 先行研究 Erdoğan and Semra (2016) : 由来に関する言及、及び使用状況の調査

- ロシアのコーカサス地方 ((1b) 参照) に居住していたチュルク系民族であるカラチャイ人がトルコのエスキシェヒルに移動。移動は 1859 年から 1944 年の間に断続的に起きたもので、いずれもロシア（ロシア帝国およびソビエト連邦）の圧力を受けてのもの。
- 移動した人々、およびその子孫の言語が現在のエスキシェヒル・カラチャイ語である。
- 移動しなかったカラチャイ人が現在もコーカサス地方に居住している。移動しなかったカラチャイ人の言語は単純にカラチャイ語、もしくはカラチャイ・バルカル語と呼ばれ

る (Seegmiller 1996)。

- d. エスキシエヒルの各地域のカラチャイ人の人口数：7306 人
- e. 10 代ではすでにエスキシエヒル・カラチャイ語を使用するものはない。また 20 代以上でも家族内や日常会話などのみで使用。

### 3. エスキシエヒル・カラチャイ語のアクセント

#### 3.1. 基本アクセント

エスキシエヒル・カラチャイ語は語末音節にアクセントが置かれる（ピッチの上昇が生じる）。これは他のチュルク諸語と同様の特徴である。本発表ではこれ以降、このようなアクセントを基本アクセントと呼ぶ。

#### (3) 基本アクセント

<b>alma</b> リンゴ	“リンゴ”
<b>alma-la</b> リンゴ-PL	“リンゴ（複数）”
<b>alma-lar-um</b> リンゴ-PL-1.SG.POSS	“私のリンゴ（複数）”
<b>alma-lar-um-dan</b> リンゴ-PL-1.SG.POSS-ABL	“私のリンゴ（複数）から”

※ 太字部分にアクセントが置かれる。また、エスキシエヒル・カラチャイ語では複数形接尾辞の末尾の /r/ は音節末においては削除される。

本発表では佐藤 (2013, p. 51, 59) のトルコ語の分析にならい、以下の韻律語形成規則および H トーン付与規則を仮定し、エスキシエヒル・カラチャイ語の基本アクセントを記述する。

#### (4) a. 韻律語形成規則

韻律語： {左；語彙語}

語彙語の左境界と韻律語の左境界をそろえよ。

#### b. H トーン連結規則

アクセントが指定された音節があれば、H トーンをそれに連結せよ。そうでなければ韻律語の右境界に隣接する音節に連結せよ。

#### 3.2. 例外アクセント

上で述べたように、エスキシエヒル・カラチャイ語では基本的に語末音節にアクセントがある。しかし、以下の (5) に示す形態素が現れる場合、(6) に示すように語末音節ではなく、その形態素の直前の音節にアクセントが置かれる。本発表ではこのような語末音節以外の位置に置かれるアクセントを「例外アクセント」と呼ぶことにする。

- (5) 人称マーカー        -mA (1人称単数), -sA (2人称単数), -dI (3人称)  
                               -bIz (1人称複数), -sIz (2人称複数)

否定接尾辞        -mA

小辞                -dA “～も”、-mI “～か”

※ /A, I/ はそれぞれ母音調和により交替する母音を表す。トルコ語とエスキシエヒル・カラチャイ語の場合、/A/ は /a, e/ どちらかで実現する母音を、/I/ は /i, u, y, u/ のどれかで実現する母音を表す。また小辞という用語は福盛 (2010) を参考にした。

- (6) dzuw-un-ur-sa        “君は体を洗う”  
       洗う -REF-AOR-2.SG
- al-ma-duu-m            “私は取らなかった”  
       取る-NEG-PAST-1.SG
- ol-da                    “彼(女)も”  
       彼(女)-も
- al-duu-n-muu          “君は取ったのか?”  
       取る-PAST-2.SG-Q

※ 波線が付された部分が (5) に示した形態素である。

トルコ語でもこのような例外アクセントを生じさせる形態素の存在が知られている(具体例は次節で示す)。Inkelas and Orgun (2003) や佐藤 (2013) などではトルコ語の例外アクセントを生じさせる形態素にはアクセントの指定が語彙的に成されていると主張する。本発表でもトルコ語の研究と並行的にとらえ、エスキシエヒル・カラチャイ語の (5) の形態素はアクセントの指定が語彙的に成されていると考える。そして、(4b) に示した規則によりアクセントの指定がある音節に H トーンが付与されると考える。

- (7) /<sup>ˆ</sup>sa/, /<sup>ˆ</sup>ma/, /<sup>ˆ</sup>da/, /<sup>ˆ</sup>mI/

/dzuw-un-ur-<sup>ˆ</sup>sa/        /al-<sup>ˆ</sup>ma-duu-m/        /ol-<sup>ˆ</sup>da/        /al-duu-n-<sup>ˆ</sup>muu/

韻律語形成規則        (dzuw-un-ur-<sup>ˆ</sup>sa)<sub>PW</sub>    (al-<sup>ˆ</sup>ma-duu-m)<sub>PW</sub>    (ol-<sup>ˆ</sup>da)<sub>PW</sub>        (al-duu-n-<sup>ˆ</sup>muu)<sub>PW</sub>

H トーン連結規則        (dzuw-un-ur-<sup>ˆ</sup>sa)<sub>PW</sub>    (al-<sup>ˆ</sup>ma-duu-m)<sub>PW</sub>    (ol-<sup>ˆ</sup>da)<sub>PW</sub>        (al-duu-n-<sup>ˆ</sup>muu)<sub>PW</sub>

※ 本発表では「直前の音節にアクセント置け」とする形態素がもつ語彙的な指定を「<sup>ˆ</sup>」で示す。

#### 4. チュルク諸語のアクセントに関する類型論的考察

上では、エスキシエヒル・カラチャイ語に例外アクセントを生じさせる形態素が存在することを示した。ここでは、同じチュルク諸語であるトルコ語、および現代ウイグル語を取り上げながら、チュルク諸語のアクセントに関する類型論的考察を行う。

#### 4.1. トルコ語

上でも述べたが、トルコ語では (8) に示すように、語末音節以外の位置にアクセントを生じさせる接尾辞が存在する (Göksel and Kerslake 2005, 福盛 2010, 佐藤 2013 など)。

(8) トルコ語の例外アクセントを引き起こす形態素

a. 直前の音節にアクセントを置く形態素

人称マーカー	-Im (1 人称単数), -sIn (2 人称単数), -dIr (3 人称)
	-Iz (1 人称複数), -sInIz (2 人称複数)
否定接尾辞	-mA
小辞	-dA “～も”、-mI “～か”

b. それ自身にアクセントが生じる形態素

現在形接尾辞	-Iyor	gel-iyor “彼(女)は来ている” 来る-PRS
副詞化接尾辞	-ArAk	bak-arak “見ながら” 見る-ながら

またトルコ語では (9) に示すように例外アクセントと基本アクセントによる最小対も確認される。

(9) a. 例外アクセント -mA (否定接尾辞)	oku-ma “読むな” 読む-NEG
b. 基本アクセント -mA (名詞化接尾辞)	oku-ma “読むこと、読解” 読む-NZL

上でも述べたように、Inkelas and Orgun (2003) や佐藤 (2013) などではこれらの例外アクセントを引き起こす形態素にはアクセントの指定が語彙的に成されていると考える。すなわち、アクセント情報の指定がある形態素をもつという点でトルコ語とエスキシェヒル・カラチャイ語には共通点がみられる。

#### 4.2. 現代ウイグル語

一方、現代ウイグル語では、発表者の調査によれば、アクセント情報の指定がある形態素は存在しないと考えられる。例えば、現代ウイグル語にもトルコ語と同様に、否定接尾辞の /-mA/ と名詞化接尾辞の /-mA/ があるが、これらはアクセントによる区別はなく同音異義語となる。

(10) bas-ma “印刷するな” 印刷する-NEG	bas-ma “印刷” 印刷する-NZL
körgæz-mæ “見せるな” 見せる-NEG	körgæz-mæ “展示” 見せる-NZL

※ 現代ウイグル語の /A/ は母音調和により /a, æ/ どちらかで実現する母音を表す。な

お、現代ウイグル語の先行研究 (Nazhip 1971, p.64 と Hahn 1991, p.29) では、トルコ語同様、否定接尾辞の /-mA/ では、その直前の音節にアクセントがあるとしているが、発表者が調べた限りではそのようなアクセントパターンは得られなかった。

これ以外の接尾辞でも、語末音節以外の位置にアクセントを生じさせるような接尾辞は現段階では見つかっていない。

(11) a. -du 〈人称マーカー (3人称)〉

bil-i-**du**                    \*bil-i-**du** “彼は知っている”  
 知る-PRS-3

b. -mu “～も”                    kitap-**mu**                    \*kitab-**mu** “本も”  
 本-も

c. -mu “～か”                    kel-di-**mu**                    \*kel-**di-mu** “彼は来たか?”  
 来る-PAST-Q

※ (11a) では3人称のみ挙げているが、他の人称のアクセントも同じ振り舞いを示す。

つまり、少なくとも現段階までで得ているデータをみる限り、現代ウイグル語ではトルコ語、エスキシェヒル・カラチャイ語と異なり、アクセント指定をもった形態素がないと考えられる。

### 4.3. 韻律類型論

(12) Igarashi (2012) の日本語諸方言の韻律類型論

[±lexical tone] : 心的辞書内にアクセント情報の指定がある形態素が存在するかどうか。

[+lexical tone]	東京方言、福岡方言
[-lexical tone]	小林方言、郡山方言

※ Igarashi (2012) ではさらに [±multiword AP] という文レベルの韻律パターンに関する基準も設けているが、本発表では文レベルの韻律については扱っていないため、ここでは議論しない。

(13) チュルク諸語も同じように類型が可能?

[+lexical tone]	トルコ語、エスキシェヒル・カラチャイ語
[-lexical tone]	現代ウイグル語

## 5. 今後の課題

(14) a. エスキシェヒル・カラチャイ語のアクセントの記述

- ・例外アクセントが韻律語内に複数存在する場合のアクセントの実現
- ・複合語、句のアクセントパターン
- ・コーカサスのカラチャイ語との対照

b. チュルク諸語のアクセント類型論

- ・言語ごとのデータの拡充（文レベルの韻律のデータ収集など）

## 謝辞

本研究は日本学術振興会、科学研究費基盤研究 16H07034（研究代表者：菅沼健太郎）の助成を受けて行われた。記して謝意を表す。また、エスキシェヒル・カラチャイ語、現代ウイグル語のデータはそれぞれ以下のコンサルタントの協力により得られたものである。ここに記して感謝の意を表す。

エスキシェヒル・カラチャイ語：アクバイ・オカン・ハルク氏、男性、1973 年生まれ、トルコ共和国 エスキシェヒル県 エスキシェヒル市出身。同氏はエスキシェヒル・カラチャイ語とトルコ語のバイリンガルであるが、第一言語はエスキシェヒル・カラチャイ語である。

現代ウイグル語：G.M. 氏、女性、1988 年生まれ、ウルムチ出身、同氏は漢語（いわゆる中国語）と現代ウイグル語のバイリンガルであるが、第一言語は現代ウイグル語である。※氏名は本人の意向によりイニシャルのみ示す。

## 略記表

1 : 1 人称 (first person)、2 : 2 人称 (second person)、3 : 3 人称(third person)、ABL : 奪格 (ablative)、AOR : アオリスト (aorist)、NEG : 否定 (negative)、NZL : 名詞化接尾辞 (nominalizer)、PAST : 過去 (past)、PL : 複数 (plural)、POSS : 所有接尾辞 (possessive suffix)、PRS : 現在 (present)、PW : 韻律語 (prosodic word)、Q : 疑問 (question particle)、REF : 再帰 (reflexive)、SG : 単数 (singular)

## 参考文献

- Erdoğan, Boz and Semra Günay Aktaş (2016) Diasporada Karaçay Türkçesinin kullanımı Eskişehir Örneği. *Uluslararası Türkçe Edebiyat Kültür Eğitim Dergisi* 5(1): 145-155.
- Göksel, Aslı and Celia Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Hahn, Reinhard F. (1991) *Spoken Uyghur*. Seattle: University of Washington Press.
- Igarashi, Yosuke (2012) Prosodic typology in Japanese dialects from a cross-linguistic perspective. *Lingua* 122: 1441-1453.
- Inkelas, Sharon and Cemil Orhan Orgun (2003) Turkish stress: A review. *Phonology* 20: 139-161.
- Nadzhip, E.N. (1971) *Modern Uighur*. Moscow: Nauka.
- Seegmiller, Steve (1996) *Karachay*. München: LINCOM EUROPA.
- 佐藤久美子 (2013) 『小林方言とトルコ語のプロソディー——一型アクセント言語の共通点——』福岡：九州大学出版会.
- 竹内和夫 (1985) 『トルコ語文法入門』東京：大学書林.
- 福盛貴弘 (2010) 「トルコ語のアクセントについて」 『言語研究』 137: 41-63.